

教職自主ゼミの実践と効果

曾山和彦

1. 問題及び研究の目的

今、教員の育成、教員政策に全力を傾けることが世界の潮流であると言われている。それは、次代を担う人をどう育てるか、すなわち、「人を育てる」教育が各国の行く末を大きく左右すると考えられているからである。こうした背景を受け、我が国においても、中央教育審議会（2015）が、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」という3答申をとりまとめている。さらに、この3答申の内容の具体化を強力に推進するべく、馳浩前文部科学大臣による『「次世代の学校・地域」創生プラン～学校と地域の一体改革による地域創生～』（通称；馳プラン）策定の決定がなされている（2016.1.25）。

筆者は現在、本学教職センター（以下、センター）に籍を置き、教職課程履修学生を指導する立場にあることから、「馳プラン」の中に示された「教員制度の養成・採用・研修の一体改革」の中でも、特に、「教員養成改革」に一番の関心がある。改革の具体方策として答申内に記されている「新たな課題（英語、道徳、ICT、特別支援教育）やアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善等に対応した教員養成への転換」はどのようにするとなし得るのか……。今、教職課程履修学生を指導する大学教員全員に投げかけられている「問い」であると言えよう。本学教職課程を統括する組織であるセンターは、これまで「教員養成の視点」として、「専門の強みをいかした教師をめざす」「伝統と実績のもとで仲間と教師をめざす」という2点を掲げ、多くの優れた教員を輩出すべく、各教科・教職に関する「勉強会」、教職への意識を高める報告会・交流会等を年間を通じて実施・開催してきている。近年、現役での教員採用試験合格者がコンスタントに25名前後を数えるのは、それらの方策が奏功してからではないかと考えられる。このように成果を挙げているセンターの取り組みをベースとして、今後は、さらに、「学校を取り巻く様々な教育課題に対応できる教員の養成」に向け、新たな方策を検討することが、先に述べた「問い」への答えにつながると考えられる。

本稿では、具体方策の一つとして「教職自主ゼミの実践」を紹介・提言する。日々移り変わる現在の教育の潮流に乗るには、「自ら学びに動くことができる」教師でなければ、「人格の完成」という教育の目的（教育基本法第1条）遂行は難しい。それ故、養成段階である教職課程において、「自ら」という「キーワード」を繰り返し、学生の身体になじませるような「仕掛け」が必要である。その「仕掛け」の一つが「教職自主ゼミ」である。筆者が教職課程履修学生に希望を集め、試行的な実践を開始してから4年が経ち、参加学生からの質的・量的なデータが少しずつ重ねられてきている。そこで、これまでの「教職自主ゼミの実践」を振り返り、その効果について考察を加えることが本研究の目的である。

2. 教職自主ゼミ（通称；曾山ゼミ。以下、ゼミ）について

平成 24（2012）年 10 月に開始。既に第 1 期生、第 2 期生は卒業。2016 年度の 4 年生が第 3 期生、3 年生が第 4 期生、2 年生が第 5 期生にあたる。

(1) 対象学生

筆者が「教職入門」で担当する法学・経営・経済学部の教職履修学生のうち、将来、教職への希望が強く、より学びを深めたいとする希望学生各学年 10 名程度。2 年生の後期（10 月）から募集（別資料 1）を開始するため、総学生数は約 30 名のゼミである。なお、第 5 期生からは人間学部の教職履修学生にも対象を拡げている。

(2) 内容

＜後期ゼミ；10 月～3 月＞3 年生が中心。2 年生はこの後期から参加。4 年生は自由参加。

- ・第 1 回～第 2 回；筆者による講義&演習 例；「めざしたい教師像」
- ・第 3 回～第 8 回；3 年生による各 15 分の発表&意見交換
- ・第 9 回；4 年生による 60 分の発表&意見交換
- ・第 10 回（最終）；筆者による講義&演習 例；「教師になる君たちに贈る言葉」

*その他のゼミ行事として、「クリスマス会」「卒業生を送る会」「秋田県田沢湖スキー場にてゼミ合宿（自由参加）」を開催。

＜前期ゼミ；4 月～7 月＞3 年生が中心。4 年生は自由参加。

- ・第 1 回；筆者による講義&演習 例；「心が動き出す言葉」
- ・第 2 回～第 7 回；3 年生による各 15 分の発表&意見交換
- ・第 8 回；もう一度発表したい希望学生による各 15 分の発表&意見交換
- ・第 9 回～第 10 回（最終）；筆者による講義&演習 例；「ゼミ学生に伝えたいこと」

*その他のゼミ行事として、「ゼミ Day キャンプ」「オープンゼミ（ゼミ OB との交流会）」を開催。

(3) ゼミ学生の教員採用試験合格実績

Table1 は、ゼミ学生のこれまでの教員採用試験合格実績である。本学は、理系からの合格者は以前から多かったが、2014 年のゼミ開始以降、本ゼミからの文系合格者がコンスタントに出ている。なお、本ゼミは 2 年生後期から活動を開始するが、ゼミに参加を決めた後、一般企業等への進路変更をした学生も、希望があれば卒業まで本ゼミへの参加を認めている。

(4) その他

ゼミ活動の記録として、各期とも「軌跡」という報告集を作成・発行している。

Table1 ゼミ学生の教員採用試験合格実績

卒業年度	期	ゼミ学生数	合格数（校種・教科）	参考；本学全体合格数（校種・教科）
2014	1期	13(8)	2（高商業）	25（小 中数 中理 高数 高理 <u>高商業2</u> 、高農業 高工業）
2015	2期	6(4)	2（中社1・小1）	26（ <u>小1</u> 中数 中理 <u>中社1</u> 、高数 高理 高商業2、高農業 高工業）
2016	3期	9(4)	2（中社2）	26（小 中数 中理 <u>中社2</u> 高数 高理 高商業3、高農業 高工業）

* 「ゼミ学生数」の括弧内に記した数値は、最終的に教職を目指したゼミ学生数。

* 2015 小学校合格学生は、文部科学省小学校教員資格認定試験合格により、小学校を受験。

3. 研究の方法

(1)対象

質問紙調査の対象として、実験群は、ゼミ学生13名（3年男子3名、3年女子2名、4年男子3名、4年女子5名）とした。また、対照群は、教職履修1年生109名（男子83名、女子26名。男子83名中、2年次から履修を開始した2年生5名を含む）とした。また、「ゼミの教育的効果」に関する自由記述調査の対象として、第1期から第4期までのゼミ長4名（第1、2期ゼミ長は既卒、第3期ゼミ長は4年、第4期ゼミ長は3年）とした。

(2)調査時期

2016年9月～10月

(3)調査内容と手続き

本研究では、ゼミ学生及び教職履修1年生に対する質問紙調査と、歴代ゼミ長に対する「ゼミの教育的効果」に関する自由記述調査により効果を検討することとした。

内容を調査する質問紙の作成にあたり、以下3つの測定尺度を用いることとした。

①自尊感情尺度

Rosenberg（1965）の「自尊感情尺度」10項目を用いた。この尺度は、自分自身に対する評価感情を測定するものであり、具体的には、「以下の項目は、現在の自分の状態や気持ちにどの程度当てはまりますか」という教示に対して、4件法（まったくそう思わない；1～いつもそう思う；4）で回答を求めた。逆転項目については、データを統計処理する際に、得点を逆配点（4点→1点、3点→2点、等）とした。自分自身、自尊感情を高く認知しているほど、高得点になるように設定されている。なお、得点の範囲は、10点から40点である。

②ソーシャルスキル尺度

菊池（2007）の「KiSS-18」18項目を用いた。この尺度は、対人関係を円滑にするスキルを総合的に測定するものであり、具体的には、「あなたの日頃の行動を考えたとき、以下の項目はどれくらい当てはまりますか」という教示に対して、5件法（いつもそうでない：1～いつもそう：5）で回答を求めた。なお、ソーシャルスキル尺度得点の範囲は、18点から90点である。

③適応感尺度

大久保（2005）の「青年用適応感尺度」30項目を用いた。この尺度は、周囲にとけ込み、なじめていることから生じる気楽さ、快適さ、居心地の良さの感覚を表す11項目からなる「居心地の良さの感覚」、課題や目的があることによる充実感を表す7項目からなる「課題・目的の存在」、周囲から信頼され、受容されている感覚を表す6項目からなる「被信頼・受容感」、周囲との関係による劣等感の無さを表す6項目からなる「劣等感の無さ」から構成される。具体的には、「あなたは大学生活を考えたとき、日頃どのように感じていますか」という教示に対して、5件法（全く当てはまらない：1～非常によく当てはまる：5）で回答を求めた。なお、各下位尺度の得点の範囲は、「居心地の良さの感覚」が11点から55点、「課題・目的の存在」が7点から35点、「被信頼・受容感」が6点から30点、「劣等感の無さ」が6点から30点である。

上記3尺度から構成された質問紙を対象者であるゼミ学生、教職履修1年生に対して、ゼミ及び講義時間中に配布・実施・回収した。なお、質問紙は個人の特ができないよう無記名とした。所要時間は15分程度であった。また、歴代ゼミ長に対する「ゼミの教育的効果」に関する自由記述調査は、各ゼミ長に電子メールによる回答・報告を依頼した。

4. 研究の結果

(1) 質問紙調査結果から

質問紙を構成する3つの測定尺度、及び適応感尺度下位尺度別に平均得点と標準偏差を算出し、 t 検定を行った（Table2）。その結果、「自尊感情」「ソーシャルスキル」「適応感」のすべてにおいてゼミ学生の方が教職履修1年生よりも有意に得点が高いことが明らかになった。特に、「適応感」における得点差が大きく（ $t(120) = -3.94, p < .01$ ）、下位尺度得点結果から、ゼミ学生は教職履修1年生よりも大学生活にとけ込み、なじめているという居心地の良さ（ $t(120) = -2.83, p < .01$ ）、課題や目的があることに伴う充実感（ $t(120) = -2.82, p < .01$ ）、周囲から信頼され、受容されている感覚（ $t(120) = -3.64, p < .01$ ）、周囲との関係による劣等感の無さ（ $t(120) = -2.83, p < .01$ ）のそれぞれについて、良好に受け止めていることが明らかになった。

Table2 各尺度におけるゼミ学生、教職履修1年生の平均値の比較

	ゼミ学生 N = 13	教職履修1年生 N = 109	t 値
自尊感情	27.08 (4.15)	23.84 (4.81)	-2.32 *
ソーシャルスキル	62.69 (7.32)	54.90 (12.50)	-2.20*
適応感	122.08 (18.07)	99.24 (19.91)	-3.94**
居心地	45.23 (8.18)	37.27 (9.73)	-2.83**
課題・目的	30.54 (5.55)	25.71 (5.88)	-2.82**
被信頼・受容	22.54 (5.53)	16.60 (5.57)	-3.64**
劣等感の無さ	23.77 (2.13)	19.67 (5.16)	-2.83**

() 内は標準偏差 * p<.05 ** p<.01

(2) 「ゼミの教育的効果」に関する歴代ゼミ長の自由記述から

ゼミの教育的効果について、歴代ゼミ長の自由記述（別資料2）をもとに、KJ法により項目毎に整理した（Table3）。各ゼミ長が共通して感じとっている効果は、「先輩や仲間とのふれあい・支え合いの感覚」である。「1番よかったことは同じ志をもつ仲間に出会えたこと」等の記述にあるように、学部や学年の枠を超え、将来の「教職」という同じ目標をもつ仲間が集う学びの場であるゼミでの活動を通し、先輩や同期の仲間、後輩とのつながりが強く・太くなっている様子が見てとれる。また、「私が感じる大きな教育的効果は、ゼミ学生自身の自尊感情・ソーシャルスキルの向上である」等の記述にあるように、人とのかかわりを通して育まれる力の伸びを、各自が気づき、成長を感じている様子も見てとれる。本ゼミでは、毎回、構成的グループ・エンカウンター（Structured Group Encounter。以下、SGE）の手法を取り入れた活動展開の工夫をしているが、國分・片野（2001）が述べるSGEの原理である「ふれあいと自己発見」に迫ることができているのが、本ゼミではないかと考えられる。

Table3 「ゼミの教育的効果」に関する歴代ゼミ長の自由記述

<先輩や仲間とのふれあい・支え合いの感覚>

1番よかったことは同じ志をもつ仲間に出会えたこと／「教職一本」という学生は文系学部においてはそれほど多くない。そうした中、「教職一本」という同じ目標を持った仲間とともに卒業まで学びあえたことは、私にとって最高の環境での学びであった／同期の仲間と切磋琢磨しあえる環境があるのはゼミの良いところ／ゼミ学生同士の絆も深まり、そこで深くなった絆が大学でのゼミ活動に活かされている。それによりゼミ学生たちはまた深い学びができる／お互いに認め合い、高めあえる仲間は、短い学生生活において非常に重要な存在／ゼミでの学びが後輩や同期たちに連鎖し、その学びを受けた後輩たちがさらに後輩たちに学びをつなげ、そこでまた教員になろうと思う人が出てくる／「縦のつながりと横のつながり」が強い

<教育に活かせる理論・技法の習得>

教員という仕事は人前で話す場面ばかり。何百人の前で話をしなくてはならないという場面もある。そんな時でも、緊張しすぎることなく、自分らしく話ができるのは、このゼミでの活動があったから／人付き合いのコツを掴むことができた／教えていただいた演習を普通の授業の中で取り入れることはなかなか難しいが、4月の学級開きの際に活用することができた／教師になる心構えや一般人としての常識を学んだ／

<自己への気づき>

私を感じる大きな教育的効果は、ゼミ学生自身の自尊感情・ソーシャルスキルの向上である／先輩だけでなく、後輩が入ったことにより、自分たちも下手な姿は見せられないという思いが強くなり、良い緊張感、責任感が生まれている／責任のある貴重な経験をすることで、責任感や達成感、充実感を本当に多く得ることができている／自分自身を大きく変え、成長させてくれる場だと思う

<自己の変容>

始めの頃は、みんなの前に立って話をするということに緊張し、上手く話せない、上手く伝えられないという失敗ばかりだった。しかし、回を重ねるごとにその緊張はよい緊張に変わり、自分らしさや自分のやり方、自分のスタイルを見つけることができた／自然と自分や他人を認めることができるようになった／教育に関する意見や考え方を様々な人に聞くことで刺激を受け、自分自身の知見を広めることにつながった／自分自身やゼミ学生が成長したと感じる部分が多い。そのうちの一つは何とんでも「人とかかわるスキル」である／話し方や立ち居振る舞い等「話をするスキル」も大きく成長してきた／ゼミに入った当初は、全体の方を見て、堂々と話すことはなかなかできなかったが、今では全体を見て、一人一人の目をつかみながら、落ち着いて話すことができている／ゼミ外で友人とかかわるときや、目上の方とかかわるとき等でも、人との良いかかわり合いができていると感じる

5. 考察

本研究の結果から、ゼミの教育的効果について考察を加えたい。1965年に1,947,657人であった18歳人口は、2014年には1,180,838人となり、年々減り続ける現状にある(文部科学省, 2014)。このような現代社会は、大学・学部を問わなければ誰もが大学に入ることができる「大学全入時代」と呼ばれる時代であり、以前のように明確に学究を志す学生だけではなく、多様な学生が入学してくる時代とも言える。中村(2009)は、大学教育について、「教員が学問の成果を教えることから、学生が学習を進めるためのものに」という質的な転換を図る必要性、及びそのための具体方策として、ゼミナール実施の必要性を指摘している。また、近年、大学における授業を改善しようとする試みは、FD(Faculty Development; 教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的取り組みの総称)活動として、各地の大学にて多種多様に展開されている。大学授業改善における先行研究としては、杉江(2000)、関田(2005)、安永(2009)などによるものがあり、学生が積極的に学びに参加する授業づくりの方向性として、「双方向の話し合い」「対話中心の授業」等が示唆されている。このような授業づくりの方向性は、大学教育の質的転換をめざした中央教育審議会答申(2012)の中で初めて示された「アクティブラーニング(以下、AL)」

に重なる。答申は、「学生からみて受動的な教育の場では生涯に亘って学び続ける力、主体的に考える力をもった人材は育成できない」と指摘し、AL 型授業への転換の必要性を大学教育の場に投げかけたものである（安永ら、2016）。

本研究は、以上のような、大学教育を取り巻く現状、授業改善の先行研究、中央教育審議会答申を鑑み、教職自主ゼミの実践と効果について考察するものである。筆者はこれまでも、学生の学習意欲を高める授業改善の検討を継続して研究してきた（曾山、2008、曾山、2009、曾山、2010）が、その中で、「講義形式による受け身の授業ではなく、学生と教師、学生同士のかかわりが随所に盛り込まれた参加型授業は、学生の学習意欲を高めるための一方策として効果がある」と指摘している。また、自らが募って学び合う「サポートグループ」の効果研究では、「自尊感情向上やバーンアウト軽減」についての示唆を得ている（曾山、2006）。本研究は、実験群としてゼミ学生、対照群として教職履修1年生に対する質問紙調査、及び歴代ゼミ長に対する自由記述調査を実施したところ、これまでの先行知見に見られる、「学びへの意欲の向上」「自尊感情、ソーシャルスキルの向上」「適応感の向上」等の教育的効果が明らかになったと考えられる。河内（2005）が、首都圏の大学生2,104名を対象に調査した結果から述べている「大学生の実像—本当はもっと勉強したい」という言葉も、自主的にゼミに参加する学生の姿を見ていれば納得する言葉である。

ゼミの教育的効果に最も大きなプラスの影響を及ぼしているのは、「教師という同じ目標をめざす仲間」の存在」と考えられる。歴代ゼミ長の自由記述にあるように、「このゼミに入ってよかったことはたくさんあるが、1番よかったことは同じ志をもつ仲間に出会えたこと」「『教職一本』という同じ目標を持った仲間とともに卒業まで学びあえたことは、私にとって最高の環境での学びであった」「ゼミでの学びが後輩や同期たちに連鎖し、その学びを受けた後輩たちがさらに後輩たちに学びをつなげ、そこでまた教員になろうと思う人が出てくる」「先輩だけでなく、後輩が入ったことにより、自分たちも下手な姿は見せられないという思いが強くなり、良い緊張感、責任感が生まれている」等、先輩や仲間とのふれあい・支えあいが、学びへの原動力になっていることがわかる。C. ロジャーズは、「よくなる力が人間に内在しているという人間への信頼感」（國分、1980）をもち、その人間観をもとに、「傾聴」を核とする非指示的なアプローチを提唱した心理学者である。本ゼミにおいても、筆者が常に念頭に置いていたのは、学生を引っ張る「リーダー」ではなく、伴走しながら共に学ぶ「ファシリテーター」としての自分であることであった。そのような姿勢でゼミを運営したからこそ、学生同士の主体的な学びの場が徐々に生まれたのだと考えられる。本ゼミの実践を通して、「学年、学部を超えた縦のつながり、横のつながりの糸を強く・太くしていくことで、学生同士自ら学びに向かって歩を進める」ということが明らかになった。このことが、本研究の一番の成果であると考えられる。

最後に、本研究の課題について述べておきたい。本研究は、実験群のゼミ学生データ数、対照群の選定妥当性について検討の余地がある。ゼミ学生データ数の少なさを補うには、毎年、4年生のゼミ最終時に質問紙データや自由記述データの収集をするとよいだろう。また、対照群については、教職履修1年生としたが、より明確にゼミの効果を測定するには教職を履修しない一般学生がよいのか、比較学年を4年生として揃えたらよいのか等、検討する必要があると考えられる。

【引用文献】

- ・河内和子 2005 自信力が学生を変える－大学生意識調査からの提言 平凡社, 19
- ・菊池章夫 2007 ソーシャルスキルを測る：KiSS-18ハンドブック 川島書店, 29
- ・國分康孝 1980 カウンセリングの理論 誠信書房, 75
- ・國分康孝・片野智治 2001 構成的グループ・エンカウターの原理と進め方 誠信書房, 2-3
- ・文部科学省 2014 学校基本調査報告書
- ・中村博幸 2009 ゼミを中心としたカリキュラムの連続性 嘉悦大学研究論集, 51 の 3
- ・大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因－青年用適応感尺度の作成と学校別の検討－ 教育心理学研究53 307-319
- ・Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton University Press, Princeton, NJ. 星野命訳 (1970) 感情の心理と教育 (一, 二). 児童心理24 1264-1283, 1445-1477
- ・杉江修治 2000 学生主体の双方向授業づくり 中京大学教育論叢, 40 の 3, 189-198
- ・関田一彦 2005 集中講義「教育心理学」が受講者の心理的態度に与える影響 創価大学教育学部論集, 56, 研究ノート, 71-78
- ・曾山和彦・本間恵美子 2006 教師のメンタルヘルスに及ぼすサポートグループ参加の効果～自尊感情・バーンアウトの視点から～ 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要第28号, 111-118
- ・曾山和彦 2008 構成的グループ・エンカウターを取り入れた参加型授業に対する学生の意識と評価 京都大学高等教育研究第14号, 37-43
- ・曾山和彦 2009 参加型授業を受講した学生の満足度と学習意欲に関する考察 名城大学教育年報第3号, 13-20
- ・曾山和彦 2010 学習意欲を高める授業改善の検討～構成的グループ・エンカウターを活用した「教養演習」の実践～ 名城大学教育年報第4号, 10-18
- ・中央教育審議会 2012 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて－生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ－(答申)」 文部科学省
- ・中央教育審議会 2015 「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について(答申)」
- ・中央教育審議会 2015 「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申)」 文部科学省
- ・中央教育審議会 2015 「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)」 文部科学省
- ・安永悟 2009 大学における協同学習の実践－大学授業への導入－ 日本協同教育学会第6回こうべ大会プログラム・要旨集, 41-42
- ・安永悟・関田一彦・水野正朗 2016 アクティブラーニングの技法・授業デザイン 東信堂, 4

「教職曾山ゼミ」(自主ゼミ) 5期生募集

教職センター 曾山和彦

昨年度の「教職入門」「生徒・進路指導論」、今年度の「学校教育相談」の履修を終え、法学・経営・経済という学部の枠を超えたかかわりが生まれてきていることでしょう。

「人が人になるには人が必要である」…。そこで、私も含め、学生同士が様々な学び合う「ゼミ」の場を用意したいと考え、2012年10月から「教職 曾山ゼミ」を開講しました。現在は4年生(3期生)9名、3年生(4期生)10名が学びを深めています。

時間と気持ちに余裕があり、もう少し、私の講義・演習等に触れたいと考える皆さん、是非、ゼミにご参加ください。教職の先輩たちと一緒に学びを深めていきましょう！

○対象；教職課程履修「法学・経営・経済」学部 2年生

*将来、教職を強く希望する者

○開講曜日・時間；隔週の6限(18:10～19:40)。曜日はゼミ学生で話し合い、確定します。
*半期10回程度の開催です。一般授業同様、出席を重視します。

○定員；10名 *申し込み順、定員になり次第、〆切とします。

○開始；平成28年10月第3週から

○主な内容

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none">・教職に関する各種の話題提供(報告)&討論・エンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング等の演習・ゼミ合宿(2月。過去は高知県馬路村、秋田県田沢湖スキー場にて開催)・卒業生を送る会、クリスマス会、Dayキャンプ | 等 |
|--|---|

○ゼミ申し込み

ゼミへの参加を希望する場合、<学部、学年、学籍番号、名前、連絡先(電話、メールアドレス)>を記入の上、kazu3623@hotmail.com まで申し込んでください。

定員10名になり次第、募集受付を終了します。

<別資料2；歴代ゼミ長からの報告；「自主ゼミの効果」>

<1期ゼミ長A：神奈川県高校商業教諭>

私は現在、神奈川県内の県立高校で商業科の教員として勤めて2年目になる。まだまだわからないことがたくさんあり、戸惑う日々だが、自分なりに一生懸命努めている。大学を卒業してすぐ教員になった私にとって、ゼミで得た経験は財産となり、さまざまな場面で活かしていると感じている。また、これらの経験は私にとって大きな自信となった。

大学に入学と同時に教職課程を履修し、何となく教員になりたいという夢はあったものの、教職の講義を受けていても、自分が教壇に立つイメージがもてなかった。本当に教員になることができるのだろうかと不安に感じたこともあった。そんなとき、このゼミの開講の話聞き、やりたい！と思った。初めての活動は小さな部屋で3人から始まった。どんな活動をしていくか、いつ、どれくらいの頻度で活動をしていくか、そんなことを考えるところから始まった。自分たちが始めた活動に仲間という横の関係の糸ができ、それが日に日に太くなっていき、1年後には後輩という縦の関係の糸もでき、そのときはとても嬉しく感じたことを覚えている。普段の活動では、ゼミ学生が順番に自分のやりたいテーマや目標を決めていた。始めの頃は、みんなの前に立って話をするということに緊張し、上手く話せない、上手く伝えられないという失敗ばかりだった。しかし、回を重ねるごとにその緊張はよい緊張に変わり、自分らしさや自分のやり方、自分のスタイルを見つけることができた。教員という仕事は人前で話す場面ばかり。何百人の前で話をしなくてはならないという場面もある。そんな時でも、緊張しすぎることなく、自分らしく話ができるのは、このゼミでの活動があったからだと思う。

また、このゼミでの活動を通して人付き合いのコツを掴むことができたと感じている。これはこの仕事だけでなく、どんな仕事でも必要となってくるスキルだと思う。曾山先生はよく、「関係づくりの第一歩は相手への関心」とおっしゃっていた。この言葉のおかげで私は今、生徒や保護者、他の先生方と良好な人間関係を築くことができていると思っている。この仕事は1人でできる仕事ではない。特に担任をやっている今、他の先生方とのコミュニケーションをとることの大切さを感じている。普段の職員室での何気ない会話の中で初めて知る生徒の一面がたくさんある。自分には見えていない部分がたくさんあった。そんな姿を知ることができるのは、職員間での人間関係が良好だからである。苦手だと感じてしまう相手もいるが、そんなときは「修行」だと思って前向きに考えるようにしている。これも、曾山先生の教えの一つである。

ほかにも、学んだ知識や理論を実践することができたことも大きな財産となった。普段の講義の中でエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングの演習を体験することはたくさんあった。しかし、それらの演習を自分が前に立って実践するということはこのゼミでしか経験できないことだった。失敗することや間違えてしまうこともたくさんあった。しかしその度に、曾山先生から助言をいただき、仲間からアドバイスをもらい、改善点に気づくことができた。普段、曾山先生が講義の中で何気なく取り入れている演習にも、さまざまな工夫やねらい、意図があり、その後の学習活動やグループ活動がスムーズに進むための工夫なのだというのを改めて学んだ。教えていただいた演習を普段の授業の中で取り入れることはなかなか難しいが、4月の学級開きの際に活用することができた。

このゼミに入ってよかったことはたくさんあるが、1番よかったことは同じ志をもつ仲間に出会

えたこと。私は生まれ育った名古屋を離れ、一人暮らしをしている。1年以上経った今でも、慣れない環境に戸惑うことがたくさんある。生徒や保護者とかかわりの中で、嫌になることや投げ出したくなることもたくさんある。そのようなとき、ゼミの仲間と連絡をとったり、話をしたりすることによって、忘れかけていた大切なことに気づくことができる。この仕事を志したときの気持ち、忘れかけていた気持ちを思い出させてくれる。場所や校種、教科は違うが、みんなそれぞれががんばっていると思うと、明日からもがんばろうという気持ちになることができる。そんな仲間の存在は私にとってかけがえのない存在である。そして何より、曾山先生のゼミ学生になれたことが私にとって1番嬉しかったこと、誇りに思うことである。教員として大切なことだけでなく、人とかかわり方のコツや社会人としての立ち居振る舞いなど大切なことをたくさん教えていただいた。私たちゼミ学生が心から尊敬する、憧れの存在。そんな恩師、曾山先生の背中をこれからも追いつけていきたい。

< 2期ゼミ長B：神奈川県中学校社会教諭 >

曾山ゼミに参加することができるのは、2年生の後期からである。「教職入門」・「生徒・進路指導論」などの講義を3期学び、それでも学びたいという教職に強い思いを持っている学生が条件である。「自主ゼミで活動することができて充実した学生生活を送ることができた。」これが、私の自主ゼミに対する率直な感想である。約2年半の活動で感じたこと、学んだことを以下に記したい。

「自主ゼミ」は、「もっと学びたい」と思う学生が集まる場所であるため、学びに対する姿勢や意識が学部で受講する「ゼミ」よりも高いと感じていた。実際、私の先輩たちは学びへの意識がとても高く、多くのことを教えていただいた。高い意識を持った人間が集まることによって、学びの質も向上する。同じ目標に向かって、お互いに認め合い、高めあえる仲間は、短い学生生活において非常に重要な存在である。

しかし、「自主ゼミ」であるが故の難しさもある。自主的に行っているということは、強制されていないことでもあるため、「欠席するの自由」ではないかという問題である。「学びたいから参加しているのに欠席するのは矛盾している」という意見と、「強制されていないから欠席しても問題ない」という意見の対立が起こってしまった。ゼミに対する考え方の意識の統一をしなければならず、私たちは何度も互いに話をした。時には先生や先輩にアドバイスをいただき、ときには同期の仲間に愚痴をこぼし、当時は大変な思いをしたことを覚えているが、今となっては、その問題を解決する過程も、「自主ゼミ」だからこそ体験できたものだと思う。話し合いを進める中で、「自分の意見」をしっかりと相手に伝えると同時に、「相手の意見」を聴かなければならない。これがすでに、「竹刀稽古」ではなく、「真剣勝負」であったのかもしれない。

自主ゼミにおいても、やはり同期の仲間に対しては特別な思いがある。名城大学には教育学部はなく、教職課程を受講している学生が300人前後いるが、「教職一本」という学生は文系学部においてはそれほど多くない。そうした中、「教職一本」という同じ目標を持った仲間とともに卒業まで学びあえたことは、私にとって最高の環境での学びであったと言える。今はまだ、1期生が社会人2年目、私たち2期生が社会人1年目という浅い歴史ではあるが、これから年月を重ねるごとに縦のつながりが増える。縦のつながりが増えることによって、後輩（現役学生）の学びの姿勢・意識に良い効果を与えられるのではないかと考えられる。

< 3期ゼミ長C：4年生 前ゼミ長 >

私が感じる大きな教育的効果は、ゼミ学生自身の自尊感情・ソーシャルスキルの向上であると考える。自尊感情向上の理由としては、曾山先生から「君はきっといい先生になる」など、早い段階から動機付けがなされているという点やコミュニケーションの場が多くあるということである。私自身も3年間そのような言葉を受け、自然と自分や他人を認めることができるようになった。故に、自己評価をプラスに考える理由は他人とのコミュニケーションがとれている、もしくは他人から「頑張ったね」などと賞賛される、などとといったような他者評価を理由にすることが多いのではないかと考えている。マイナスに自分を評価してしまう理由は、コミュニケーションがうまくとれず、所属している集団の方針を理解できていないことから生ずるのではないかと考えている。その点、曾山ゼミでは「教職を将来強く希望する者」という明確な方針がある。途中で進路の変更があったとしてもこの方針で進めていることはゼミ学生全員が理解しているし、毎回コミュニケーションをとる時間も設けられている。それ故、自分に対してマイナス評価を出すことは他の教職メンバーと比べて少ないのではないだろうか。ソーシャルスキルの向上の理由としてはゼミ活動の中で「1分間スピーチ」など人とかかわり合いの中で必要とされるスキルを鍛えることのできる活動を「道場の竹刀稽古」のように繰り返しているという点である。

またこのゼミでは秋田、高知など様々な場所に足をのばす機会が多くあり、その中で教育に関する意見や考え方を様々な人に聞くことで刺激を受け、自分自身の知見を広めることにつながった。様々な場所に足をのばすことでゼミ学生同士の絆も深まり、そこで深くなった絆が大学でのゼミ活動に活かされている。それによりゼミ学生たちはまた深い学びができる。このようにゼミでの学びが後輩や同期たちに連鎖し、その学びを受けた後輩たちがさらに後輩たちに学びをつなげ、そこでまた教員になろうと思う人が出てくる。そして教員になりゼミでの学びを活かして活躍している。これもゼミの中で行われる活動の中で育まれたスキルが活かされているという点で、教育的効果の1つに挙げられると考える。

以上のように「教職自主ゼミの教育的効果」は自尊感情の向上とソーシャルスキルの向上、そして様々な場所に足を運ぶ機会があるため刺激を受けることができ、そこでの刺激が後輩たちにつながるということを挙げた。これは私が感じる具体的な効果だが、他にもこのゼミでは曾山先生から教師になる心構えや一般人としての常識を学んだ。ゼミ学生からはシェアリングなどで他者からのフィードバックを受けることで新しい自分に気づくことができた。この気づきや学びを自分に活かすことができる…これもゼミの教育的効果の1つなのではないかと考えた。

< 4期ゼミ長D : 3年生 現ゼミ長 >

私は、教職自主ゼミである曾山先生のゼミに入り、約1年半学んでいる中で、自分自身やゼミ学生が成長したと感じる部分が多い。そのうちの一つは何とんでも「人とかかわるスキル」である。曾山ゼミでは、日頃から先輩や同期の仲間、後輩とグルーピングをするので、そうした中でうなずきや、相手の名前を呼ぶ等を意識して活動することにより、ゼミ外で友人とかかわるときや、目上の方とかかわるとき等でも、人との良いかかわり合いができていと感じる。他にも、曾山先生の講演会等に参加する中で、現場の学校の先生と話す機会も多くあり、様々な話を聞くことで、多くの知識も増え、曾山ゼミで学んだことを多く活かすことができ、毎回とても有意義な時間を過ごすことができています。また、こうしたゼミの中の毎回のグルーピングや、発表を通して、話し方や立ち居振る舞い等「話をするスキル」も大きく成長してきたように感じている。ゼミに入った当初は、全体の方を見て、堂々と話すことはなかなかできなかつたが、今では全体を見て、一人一人の目を

つかみながら、落ち着いて話すことができる。さらに、曾山ゼミでは「縦のつながりと横のつながり」が強い。自分たちよりも多くの経験とスキルを持った先輩方と日々かかわる中で、多くの経験した話やアドバイスを聞かせてもらうことができる。また、それだけではなく、先輩方の話をしている姿から、見て学べる部分も多い。このように、曾山ゼミに入らなければ出会うことが無かった先輩方から多くのことを学べている。また、先輩だけでなく、後輩が入ったことにより、自分たちも下手な姿は見せられないという思いが強くなり、良い緊張感、責任感が生まれているように感じる。このように、一人一人が先輩や後輩から多くの良い刺激をもらうことで、相乗効果が生まれ、ゼミ全体としても成長し、良い雰囲気 of ゼミになってきていると感じる。また、同期の仲間の日々の成長に驚かされることも少なくない。それは、私と同じように、日々、曾山ゼミで過ごしていることで一人一人が大きく成長してきているからだと思う。このように、同期の仲間と切磋琢磨しあえる環境があるのは曾山ゼミの良いところだといえるだろう。そして、ここまで述べてきたように自分自身の成長を自分が多く感じたり、他の人に成長したと言ってもらえたりすることも少なくないので、自分自身を認められる機会も多い。私自身、曾山ゼミに入り、ゼミ長になったことで、普通の大学生活では味わうことのできない日々を過ごせていると思う。大変なことや初めての経験は決して少なくない。しかし、こうした多くの責任のある貴重な経験をすることで、責任感や達成感、充実感を本当に多く得ることができている。私以外のゼミ学生も、行事や講演会ごとでそれぞれが役割を担い、それを達成することで、私と同じように一人一人が、責任感や達成感、充実感を得ているだろう。このように、曾山ゼミでは「自尊感情」を高める効果もあるといえる。

ここまで述べてきたように、ゼミ学生全員が成長することができているのは、教職自主ゼミである曾山先生のゼミに入ったからだと思う。私は、ここまで述べてきた多くの点が教職自主ゼミの教育的効果であると思う。このように、曾山ゼミは、自分自身を大きく変え、成長させてくれる場だと思うので、学んできたことを活かして、常に主体的に、何事にも全力で取り組み、これからも成長していきたい。

* Table 内アンダーライン部は、結果、考察等に引用した記述である。